



古くから日本人は、富士山を神が宿る山として恐れ敬い、遠くから拝んだり、実際に登って修行したり、登山をしながら山麓の神聖な場所を巡るなど、さまざまな形で信仰しました。

また、美しい富士山の姿を詩や歌に詠んだり、絵画に描きました。

多くの人々が長い間、特別な思いを持って富士山を信仰し、さまざまな芸術作品で表現してきた文化が認められ、富士山は「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」という名称で2013(平成25)年6月にカンボジアで開かれた第37回ユネスコ世界遺産委員会で、世界文化遺産に登録されました。

信仰 自然崇拜～遥拝

人々は、激しい噴火を繰り返す富士山を恐れました。

近づくことのできない富士山を神そのものとして、遠くから拝んだと考えられます(自然崇拜・遥拝)。



▲約13,000年前の大鹿窪遺跡には、富士山に向かって石が並べられているように見える

【旧石器時代(原始・古代)～】



▲約4,500年前の千居遺跡には、富士山と並行して40m以上の二重の帯状に石が並べられている



▲山宮浅間神社の遥拝所には、富士山を拝む方向に祭壇があり、儀式を行う際の役割ごとの席が設けられている

信仰 遥拝～登拝

富士山の噴火が激しさを増すと、富士山の神は、浅間大神と呼ばれるようになり、噴火を鎮めるために、富士山の麓に浅間神社が建てられました。

富士山の噴火が収まってきた12世紀頃から、富士山は仏(大日如来)で、山頂に仏が神(浅間大菩薩)の姿となって現れると考えられました。



【平安時代～】

神や仏の力を得ようと、多くの修験者が富士山で修行するなど、宗教的な登山が始まり、15～16世紀には、庶民の間にも広まりました(登拝)。



▲数百年の間、村山は富士山興法寺(現在の村山浅間神社・大日堂)を中心に修験者や登山者の拠点として栄えた

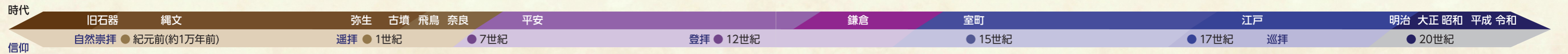
信仰 登拝～巡拝

18世紀になると、富士登山をして、家族の安全や幸せを祈る「富士講」という組織が江戸を中心とした関東で大きく発展し、多くの庶民が富士山頂を目指しました。



登山後は、浅間神社や人穴、白糸ノ滝、溶岩樹形※1、湖沼※2、湧水池など、富士山の麓の神聖な場所を巡りました(巡拝)。

- ※1 木を包み込んだ溶岩が、冷えて固まった時に木の跡が空洞になったもの
- ※2 湖や沼、池など周囲を陸に囲まれた水の塊



芸術 和歌

田子の浦ゆ
うち出でて見れば真白にそ
富士の高嶺に雪は降りける

日本最古の和歌集「万葉集」
やまのあたりの
山部赤人
(奈良時代の歌人)

芸術 絵画

寺や神社へお参りしながら富士山頂を目指す人々の様子を描いた、多くの富士参詣曼荼羅は、富士登山への勧誘のために使用されたと考えられています。



▲室町時代に描かれたとされる絹本著色「富士曼荼羅図」(国指定重要文化財・富士山本宮浅間大社蔵)

江戸時代に描かれた葛飾北斎の「富嶽三十六景」や、歌川広重の「東海道五拾三次」の浮世絵は、モネやゴッホなどの世界の画家にも大きな影響を与えました。



▲富嶽三十六景「山下白雨」



▲東海道五拾三次「由井 薩埵嶺」

芸術 物語

平安時代前期に書かれ、日本最古の物語とされる「竹取物語」には、噴火する富士山の姿が描かれています。

あらすじ(略)

竹から生まれたかぐや姫は、竹取のおじいさんとおばあさんに育てられ、美しく成長しました。かぐや姫は、多くの男性からの求婚を断り、帝と手紙のやり取りを続けました。しかし、月から迎えの使者が来ると、かぐや姫は帝へ不死の薬と手紙を渡し、月へ帰っていきました。帝は、かぐや姫のいない世界を悲しみ、駿河の国の天に一番近い山の頂で不死の薬と手紙を燃やすよう家来に命じました。それ以来、この山を「ふじの山」と呼び、山には今でも絶えることなく焼いた煙が立ち上っています。



富士山に帰るかぐや姫

富士山南麓には、竹取物語とは異なり、月ではなく富士山に帰るかぐや姫物語が伝わりました。

かぐや姫が富士山の神(浅間大菩薩)と考えられ、多くの浅間神社で祀られました。



明治時代初期に廃寺となった富士山東泉院(富士市今泉)に伝わる「富士山大縁起」には、「人々は、富士山を神や仏の住む山として恐れていましたが、かぐや姫に導かれ、男性は山頂まで、女性は中宮まで登れるようになった」と記されています。



▲村山口登山道を登った標高1,280m(栗倉)にある中宮は、中宮八幡堂といわれ、現在は祠が建てられている



▲地名の由来となった大岩がある大岩子安神社には、かぐや姫を育てたおばあさんが犬神明神として祀られている